

Title	沖縄舞踊の歴史的背景について (その1)
Sub Title	Historical background of Okinawan dances (I)
Author	清水, 富士子(Shimizu, Fujiko)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	1983
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.23, No.1 (1983. 12) ,p.35- 45
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00230001-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

沖縄舞踊の歴史的背景について

(その 1)

清 水 富 士 子*

1. は じ め
2. 舞 踊 の 発 生
3. 「お も ろ」
4. 組 踊 り の 成 立
5. 王 城 朝 薫 と 組 踊 り
6. む す び

1. は じ め

芸能の宝庫といわれる沖縄は、日本はもとより世界の芸能の中でも独特の地位を占めるものである。

芸能の中でもとりわけ“歌と踊りの島”といわれるだけあって、遠く離れた村々や島々にも様々な歌と踊りがあり、人々の生活の中に生きついている様子は、沖縄を訪れる人を驚嘆させずにはおかないのである。

沖縄の芸能は、中国、そして南方からの影響をうけ、又、日本本土の舞楽、能、若衆歌舞伎や野郎歌舞伎の影響もうけながら独特の花を咲かせている。しかもそれらを大切に守り今日に伝えて来たことは、数々の孤島苦、政治的宿命の歴史を持った沖縄の人々が、あらゆる苦難の中で、いかに伝統文化を通してたえず平和を願っていたかがうかがわれるのである。

沖縄芸能の特色には、おしなべて古風をとどめていること、濃い郷土色にいろどられていることがあげられる。その歴史は、信仰に裏づけられた自然発生的なもの、また、濃い郷土色は、沖縄の歴史、風土、伝統の特殊性の中に置いてみるべきかと思われる。

そこで、沖縄舞踊の内容を一層深く認識するために、先ず今回は日本本土との関係におい

* 慶應義塾大学体育研究所専任講師

て、これまでなされてきた諸文献を参考にして歴史的背景を考察し、数項目についてまとめたものである。

2. 舞踊の発生

沖縄舞踊ならびに音楽の源流を求めるその起源説には、今日まだ確固とした学説が確立されていないのが現状である。

そもそも人類が地上に現われ、生活をはじめた原始社会のころから感情の表現や意志の伝達の方法として、肉体（肢体）による身振りや跳躍で喜怒哀楽を表わした。それがいつしか芸能といわれ、舞踊、あるいは舞い、踊りとなったのである。

天照大神の神話が御神楽のはじめのように、沖縄の芸能のはじまりも同じで、つまり芸能の表現の場は神前（御願所、お嶽、いべ）などの拝所や、部落の「あしやぎ」のある広場などで演じられた神への奉納の芸能である。

沖縄芸能について最も古い記録は、隋書流求国伝（隋590年～617年）、李朝実録、歴代冊封使録、張学礼使録、汪揖使録、中山伝信録等の中から昔の踊りを見出す事が出来る、と沖縄芸能協会会長の阿波根朝松氏は述べている。それによると、隋書流求国伝の「杯ヲフクミ共ニ酌シ、⁽¹⁾歌呼踢蹄ス。音頗ル哀怨ナリ。子女ノ上膊ヲトリ、手ヲ揺シテ舞フ。」これは7世紀初めの記事であり、この踊りは現在の「エイサー」のようである。李朝実録の「人形及ビ鳥獸ノ形ヲ作り、王宮ニ送ル。男子少壯ノ者ヲ選ビ、或ハ黄金ノ仮面ヲ着ケ、笛ヲ吹き鼓ヲ打チテ王宮ニ詣ル。ソノ夜雜戯（いろいろなあそび）ヲ設ケ、国王臨観ス。」とある。仮面を冠ることや雜戯をすることなどが、舞踊と舞踊小劇のように推定され、この踊りは八重山の「あながま」に近いようである。歴代冊封使録の中の陳侃使録（尚清王代、1534年）の中に、「4人の琉球の子供に琉球の音楽を歌わしめ、舞踊を踊らせ、その盃を進め、身をくねらせ体を折り曲げたりして、その舞踊は面白く見られる。」とある。又、「子女4人で手をつないだり、手を折ったりし、足はそろりそろりと歩み廻っている。」とある。張学礼使録（尚質王代、1663年）の中には、「宴会で舞踊あり、1人の少年は僧形をして頭の長さが1尺5寸もあり、眉も髪も雪のように白い。」とあり、福祿寿をまねた舞踊のようである。汪揖使録（尚貞王、1683年）の中には、「円覚寺の右側の御殿で観劇した。その劇には70余人が出演し、年長者10余人は皆仮面を冠り、笛を吹き鼓を打ち、鉦を鳴らしてその中に小石を入れ、両手で代わるがわる打って、歌の拍子を取っている。そして紙のぜいを持ち、左右にそれを振る。」となっている。後の部分が、今の「ぜい踊り」の前身のようである。冊封使録の中にある中山伝信録（尚敬王代、1719年、副使徐葆光著）には、冊封式、先王諭祭以外の宴会が7回もあり、その様子がくわしく書かれている。それら

沖縄舞踊の歴史的背景について(その1)

には、今の「笠踊り」「貫花」「四竹踊」「棒踊」「獅子舞」の前身と思われるものが各宴会に踊られていることがうかがわれ、第四宴(九月の重陽の宴)では、今の「長者の大主」と全く同じものが踊られていたようである。

注 (1) 阿波根朝松著「沖縄の伝統文化」沖縄タイムス社、昭和50年、9頁～10頁。

3. 「お も ろ」

沖縄の踊りについて最も古くその様子をうかがい知れるものは、12世紀から17世紀にかけて島や村で謡われた歌謡を採録、編集した沖縄で最古の歌謡集「おもろさうし」(巻九)である。⁽²⁾ 琉球の万葉集とよばれるおもろさうしは、創世紀や神への祈願、英雄の謳歌、航海を詠じたもの、戦士を鼓舞したものなど、当時の生活と自然の多方面にわたっている。歴史書のなかった時代の琉球社会の思想や言葉を知るうえにも、きわめて貴重なものとなっている。おもろという言葉は思いという意味の「おもること」の下部を略した語で、胸の思いを韻律的な言葉でつづった歌である。その起源は、古琉球の固有信仰に発し、女神官である祝女(のろ)の語る神託(みせせる)から分化発達したものとされる。12世紀よりさらに古いものがあるだろうと推定されているが、はっきりせず、作者についてもほとんどわかっていない。この期間は、いわゆる部落時代の末期から按司時代、三山時代、王国時代前期(第一尚氏による統一国家の成立)から第二尚氏による中央集権化を経て、島津氏の琉球入りまでのおよそ6世紀間であり、本土の年代で言えば、院政時代から鎌倉、南北朝、室町、戦国時代、安土桃山時代を経て徳川の初期に至る時代である。

「おもろさうし」の編集は、首里王府によって15世紀から17世紀にかけてなされたが、その後100年間に王府の火事、原本の破損等により、現存のものは、宝永7年(1710年)に書き改められている。1531年尚清王の時、「おもろさうし」第一巻が編集され、それから80余年、島津氏琉球入りによる新しい不安の時代に、昔ながらの固有信仰が人々の心底で顧みられたこともあってか、第二巻が1617年(尚寧)編集されている。ひきつづき1623年には第三巻以下、全22巻の編集を終っている。「おもろ」は15世紀を頂点として次第に衰運に向かい、三味線渡来により人々の歌謡的意欲は、やがて三味線歌にかわっていくのである。⁽⁸⁾

「おもろさうし」巻九を、おもろ研究者は「こねりおもろ」と分類している。こねりおもろとは、こねる手を意味し、拝み手、おし手などの所作とともに舞いの手の一つである。したがって、「こねりおもろ」は振りつけの定った「おもろ」のことである。これはもともと不定型な自由の舞いであったものから定型的なものが成熟して舞が定った形を持ち、独自の地位を主

沖縄舞踊の歴史的背景について（その1）

張する段階に到達した証拠であるとみられている。（沖縄でいう踊りと舞いとは本土の感じと少し異なる。酒宴の即興的な踊り、綱引きなどの女達の勝手な動作の踊り、など、感動の所作で表現する自由型のもは舞いといい、「何々踊り」と一定の型に従って踊るのを踊りという。）

巻九では、歌の行間にところどころ注がついて（行間に注のついたものを「おもろさうし」の「ええじや書き」という）、「二手押しちへ、一手こねる」とか、「左一手押しちへ、こねて右一手」とか、「押し合ちへ拝で、押し下ちへ、打ちあげる。こねて、おうのきりして」など、「おもろ」の曲節につれて謡いながら踊ったものであることを証明している。⁽⁹⁾

今日沖縄の古典舞踊は、冠船踊りを中心にした華麗優美なものであるが、冠船踊り以前に存在した沖縄固有の踊りとしては、このような「おもろ」に振りつけられた素朴な舞踊が考えられるのである。

琉球舞踊は、前に述べたおす手、拝み手、拝み手をこね廻しておす手として差し出すこねり手、などを修飾したり、組み合わせたりして発達し、18世紀のはじめ、玉城朝薫の冠船踊りの創作により、芸術的舞踊として完成されるのである。

注 (2) 宜保栄治郎著「琉球舞踊入門」（那覇出版社）昭和54年、339～342頁。

(3) 下中邦彦著「風土記日本・第1巻・九州・沖縄編」（平凡社）昭和50年、311頁～312頁。

(4), (5), (6), 265頁～269頁。

(7) 同書273頁。

(8) 三味線はまず中国から沖縄につたわったことはたしかであるが、年代がはっきりしない。三味線の伝来するまで沖縄の楽器は鼓だけで、おもろなども鼓をうち、手拍子を取って歌っていた。三味線音楽がさかんになったのは16世紀の半ばごろであるが、島津の琉球入りののちは、人心も沈滞し、悲調をおびた音楽がよろこばれるようになる。そこに湛水（1623年～1688年）という人があらわれ、古い民謡を復活し、ほがらかな新曲をつくって沖縄三味線音楽の型をうちたてた。同書314頁。

(9) 宜保栄治郎著「琉球舞踊入門」（那覇出版社）昭和54年、341頁、342頁。

4. 組踊りの成立

「おもろ」が謡われたのがおおよそ12世紀から17世紀の初めであり、これを収録した「おもろさうし」が1531年より1623年まで全22巻の編集を完了したことは前に述べたが、三味線の伝来によって短詩型の琉歌が興り、1609年島津氏琉球入りを境にして「おもろ」が衰退し、やがて消滅して行くのである。

1609年の島津氏琉球入りは、沖縄に大きな変革を与えている。それは沖縄の文教にも強く影響し、とくに薩南儒学の影響は大きかった。もともと沖縄の学問は大きくわけて二つの系統があった。一つは最初本土から仏教の伝来によってその道が開かれ、主として五山留学の仏僧に

沖縄舞踊の歴史的背景について（その1）

よって伝えられた儒学と和学で、のちに薩摩の影響でさらに濃厚になったもの、他は中国との通交によってはじまり、中国留学生である久米村人によってもたらされた儒学と漢文学である。しかし国内ではもっぱら和文が通用し、漢文は主として中国に対して用いられている。17世紀はじめ、薩摩の学者泊如竹の渡来によって高まった儒学興隆は、羽地朝秀（向象賢）⁽¹⁰⁾の摂政時代に更に促進された。

羽地朝秀は、1667年に青年士族に対して「学文、算勘、筆法、謡、筆道、立花、容職方、医道、唐楽、庖丁、茶道、馬乗方などのうち、一芸にも達しないものは決して役職につけない」という達しを出している。

この令達は、島津氏支配下の沖縄で官吏の資格を決めたもので、主として日本本土の学芸に精通することを要求している。こうして薩摩を介しての和訓による儒学、和文、和歌など本土文化の摂取はさかんになり、おおくの和文学者が出たが、人々は又、琉球語による文芸にも手を染め、「おもろ」にかわってさかんになった琉歌や、新しい文芸として発生した組踊りの創作にも意をそそいだ。そのため18世紀の尚敬時代は、沖縄の文運開花期ともいわれる。⁽¹¹⁾

一般に舞踊は機会あるごとに催され、楽しまれたが、中央においては公事として、「冠船」⁽¹²⁾の時には冊封使に、「江戸上り」⁽¹³⁾の時には徳川将軍の観覧に供するため演ずるのが例となった。それらは琉球国営の演劇、舞踊の公演なので、国劇ともいわれた。

国劇冠船踊りは、おもろ、入子踊り、若衆踊り、二才踊り、女踊り、狂言、組棒、獅子舞い、組踊りを組み合わせてプログラムをつくり、音楽は、かぎやで風節、作田節、思納節、じゃんな節、仲村渠節、伊江節、揚作田節、平敷節、仲順節、白瀬走川節、暁節などが奏された。

特に有名なのは、1718年尚敬王の時、踊奉行、玉城朝薫が創作した組踊りと女踊りで、これが琉球舞踊を世界に誇る芸術にまで高めた基点となったのである。⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾

この琉球王に対する中国からの冊封は、中山王武寧が即位の時、1404年が第1回目であり、1866年最後の尚泰に至る460年間に21回の御冠船が来ている。

注 (10) 山里永吉著「沖縄歴史物語」勁草書房、昭和57年、6頁。

(11) 下中邦彦著「風土記日本・第1巻九州・沖縄篇」平凡社、昭和50年、279頁。

(12) 冊封使接待の「冠船」とは、歴代の琉球王が王位につくとき、中国から冊封使の来琉を乞い「琉球国中山王に封ずる」という辞令を交付される冊封の儀式をあげ、進貢貿易の沖縄代表であることを認めて貰ったものである。冊封使は大体5月頃に来て10月頃に帰るのだが、形式的なものにして、莫大な利益をあげる進貢貿易の相手であることを認めに来る中国代表なので、数百名に及ぶ一行の歓待には、国力を使い果すほど心を配った。冊封が終わった後、7つの祝宴が催され、その中で仲秋の宴と、重陽の宴には国王も出席して琉球各地の踊りを披露、冊封使の旅情を慰めた。これらの踊りを（御）冠船踊りという。

(13) 江戸上りとは（又は江戸立ちともいう）、将軍の襲職時に慶賀使（賀度使ともいう）を、国王の襲封時に謝恩使（恩謝使ともいう）を琉球から江戸に派遣することである。1609年（慶長14年）琉球が薩摩に敗北してその附庸国となった結果強要されたものである。

沖縄舞踊の歴史的背景について（その1）

宮城栄昌著「琉球使者の江戸上り」第一書房、昭和57年、11頁。

(14) 踊り奉行とは、最大級の国賓である冊封使を歓待する国劇に王府が力を入れ、冊封使渡来が決まると同時に按司（王族）、三司官（国务大臣）、表15人（三司官を補佐して政務にたずさわる高官）およびその候補者の中から歌舞音曲に優れた者を奉行に任命、責任者とした。

(15) 組踊りは沖縄古典芸術の1つで、楽劇ともいふべきである。当時あったいろいろの舞踊の振りを組合わせて作ったものである。楽器は三味線、琴、胡弓、笛、太鼓などで、討入りなどには銅鑼や爆竹を用いる。

池田弥三郎著「芸能の流転と変容」（実業之日本社）昭和51年、137頁。

仲井幸二郎・西角井正大・三隅治雄編「民族芸能辞典」（東京堂）昭和56年、163頁。

芸能史研究会編「日本の古典芸能」, 「比較芸能論」（平凡社）昭和54年、197頁～198頁。

(16) 宜保栄治郎著「琉球舞踊入門」（那覇出版社）昭和54年、25頁。

5. 玉城朝薫と組踊り

組踊劇の創作者、玉城朝薫⁽¹⁷⁾は、1684年（貞享元）に生まれ、1734年（享保19）に51歳で死んでいる。⁽¹⁸⁾

玉城朝薫は惣地頭家に生まれ、9歳の時玉城間切の惣地頭となった。13歳のころから小姓として国王の側に仕えたが、生来芸能にすぐれ、沖縄固有の音曲や舞踊はもとより、この頃士族階級の間でさかんだった能も達人であった。その上、20歳の時、尚美里王子に随行して薩摩に行ったのをはじめ、首里王府の役人として江戸に3回、薩摩には4回も往復して本土の芸能をつぶさにみている。そしてこれらの江戸行き、また薩摩行きは半年～1年もの長い滞在なので能や歌舞伎などをじっくり研究する機会に恵まれていた。彼は正徳5年5月、踊奉行に任ぜられているが、これは彼が組踊りを創作する4年前である。このことから、組踊以前でも踊りがかなり発達していたことがわかる。

朝薫は沖縄の故事や古語に精通してただけでなく、本土の歌舞、音楽の心得があったので、謡曲にヒントを得て材を沖縄の神話伝説にとり、言葉も古琉球語や日本の雅語をとり入れて韻文の戯曲を創作、こねりやしのぐなどの古い舞の手を入れて楽劇を仕組んだ。

朝薫の組踊五番⁽¹⁹⁾（五組ともいう）は、謡曲五番になぞらえられた呼び名だが、その創作も、二童敵討は小袖曾我、執心鐘入は道成寺、銘苺子は羽衣、女物狂は桜川からそれぞれヒントを得ているとみられている。その演出については、沖縄固有の音楽や舞踊を用いつつも、舞台、衣装その他で能、歌舞伎を参考にしたところが多くみられる。玉城朝薫につづいて平敷屋朝敏、田里朝直⁽²⁰⁾が出ている。その後もおおくの組踊作家が輩出して50余編の組踊を数えるが（このおおくは儒教道徳を軸とする勧善懲悪ものである）、五組（番）に比べるとその比ではなかったようである。

こうしたところから「組踊り」は五組で始まり、五組で終わった、ともいわれるのである。沖

沖縄舞踊の歴史的背景について（その1）

縄の伝統芸術の最高峰ともいべき組踊りは、昭和47年（1972）に国指定の無形文化財となった。これは組踊りという演劇の創始者たる玉城朝薫の没後238年後のことである。朝薫の詳細に至っては、年譜を記した向姓家譜（しょうせいかふ）²¹ 1冊が完全に朝薫の子孫によって残されている。このことは舞踊の歴史的流れの知ろうとする者にとって誠に幸いなことである。

注 (17) 芸能史研究会編「比較芸能論」（日本の古典芸能 10）昭和54年，平凡社，197頁～198頁。

(18) 池田弥三郎著「芸能の流転と変容」実業之日本社，昭和51年，135頁～137頁。

(19) 同書，137頁～139頁。

(20) 山里永吉著「沖縄歴史物語」勁草書房，昭和57年，227頁～236頁。

(21) 家譜については、1670年（寛文10）向象賢羽地按司が諸士系図を提出させ、諸士の身分上の秩序の維持をはかった。各家々の系統と各人の経歴が記載されている。江戸上りは中国行きや薩摩上りとならんで「旅功」を積む重要な勲庸となったので、「家譜」にはそのことがすべて記載されている。そして「家譜」は系持ちと称する支配階級たるを証する資料であったので、諸士はすべて所有していた。

沖縄文化協会「沖縄の伝統文化」（沖縄タイムス社）昭和50年，297頁～316頁。

6. む す び

冠船踊りと江戸上りを中心に沖縄の芸能の本流は首里の士族階級のあいだに保持されつつ祝宴の催しで演ぜられ、都市における季節の「踊り念仏」また農村の豊年祭である「八月遊び」などに受け継がれてきた。ところが廃藩置県（1879）とともに冊封使の渡来や江戸上りもなくなったため、組踊りをはじめとする宮廷舞踊はその拠りどころを失った。社会の変革にあった首里士族の中の芸能達者の人たちは、新しく劇場をつくり、これらの芸能を興行して一般民衆に自由に観覧せしめることとなり、以来今日まで新しい要素を加えつつ広く一般化することとなったのである。

舞踊の歴史的背景をしらべる程に、颯風と早魁、そして特に薩摩の搾取にあえぎながらも琉球の伝統文化をいかにして守るか、武力では負けても文化面では優ろうという意欲、いわば薩摩に対する平和攻勢にはすさまじいものを強く感じた次第である。

不十分な所がたくさんあるが、今回は沖縄舞踊の歴史的背景について大まかに捉えたつもりである。はじめに述べたごとく、沖縄は中国、南方の文化を強く受けており、また、薩摩統治以後日本文化をとり入れざるをえなかった。これらの文化の影響がどのように舞踊に反映しているかを今後の研究課題として追及して行くものである。

沖縄舞踊の歴史的背景について(その1)

(江戸上り)

回数	年次	年次	使名	年次	正使名	副使名
1	1634	(寛永 11)	謝 恩 使	(尚 豊 襲 封)	佐敷王子朝益	
2	1644	(正保 元)	謝 恩 使	(尚 賢 襲 封)	国頭王子正則	
3	1649	(慶安 2)	謝 恩 使	(尚 質 襲 封)	具志川王子朝盈	
4	1653	(承応 2)	慶 賀 使	(家 綱 襲 職)	国頭王子正則	
5	1671	(寛文 11)	謝 恩 使	(尚 貞 襲 封)	金武王子朝興	越来親方朝誠
6	1682	(天和 2)	慶 賀 使	(網 吉 襲 職)	名護王子朝元	恩納親方安治
			慶 賀 使	(家 宣 襲 職)	美里王子朝禎	富盛親方盛富
7	1710	(宝永 7)	謝 恩 使	(尚 益 襲 封)	豊見城王子朝匡	与座親方安好
			慶 賀 使	(家 継 襲 職)	与那城王子朝直	知念親方朝上
8	1714	(正徳 4)	謝 恩 使	(尚 敬 襲 封)	金武王子朝祐	勝連親方盛祐
9	1718	(享保 3)	慶 賀 使	(吉 宗 襲 職)	越来王子朝慶	西平親方朝叙
10	1748	(寛延 元)	慶 賀 使	(家 重 襲 職)	具志川王子朝利	与那原親方良暢
11	1752	(宝暦 2)	謝 恩 使	(尚 穆 襲 封)	今帰仁王子朝義	小波津親方安蔵
12	1764	(明和 元)	慶 賀 使	(家 治 襲 職)	読谷山王子朝恒	湧川親方朝喬
13	1790	(寛政 2)	慶 賀 使	(家 斉 襲 職)	宜野湾王子朝祥	幸地親方良篤
14	1796	(寛政 8)	謝 恩 使	(尚 温 襲 封)	大宜見王子朝規	安村親方良頭
15	1806	(文化 3)	謝 恩 使	(尚 瀬 襲 封)	読谷山王子朝勅	小禄親方良和
16	1832	(天保 3)	謝 恩 使	(尚 育 襲 封)	豊見城王子朝典	沢岷親方安度
17	1842	(天保 13)	慶 賀 使	(家 慶 襲 職)	浦添王子朝熹	座喜味親方盛普
18	1850	(嘉永 3)	謝 恩 使	(尚 泰 襲 封)	玉川王子朝達	野村親方朝宜

(注) 宮城栄昌著「琉球使者の江戸上り」11頁～12頁

琉球歴史年表

時代	王統	国王	即位	薨去退位	シナ 曆		在位年数	寿
					即位	薨去退位		
鎌倉	舜天	舜天	西曆 (1187) 文治三	嘉 禎 三	(宋) 淳熙十四	嘉 熙 元	51	72
			源頼朝征夷大將軍となる(日)					
	天王	舜馬順熈	舜馬順熈	(1238) 暦 仁 元	宝 治 二	嘉 熙 二	淳 祐 八	11
義本				義本	(1249) 建 長 元	正 元 元	淳 祐 九	宝 祐 七
	饑饉となり、疫病が流行す、英祖に位をゆずり退位。(琉) 日蓮、鎌倉で説法をはじめ。(日)							
倉	英	英	(1260) 文 応 元	正 安 元	(南宋) 景 定 元	(元) 大 徳 三	40	72
			久米、慶良間、伊平屋の離島からはじめて入貢す。(琉) 元寇、元の使者を竜ノ口で斬る。(日)					

沖縄舞踊の歴史的背景について (その1)

時	祖	たい 大	せい 成	正 (1300) 安 二	延 慶 元	(元) 大 徳 四	至 大 元	9	62						
		王	えい 英	じ 慈	延 (1309) 慶 二	正 和 二	至 大 二	皇 慶 二	5	46					
					たま 玉	ぐしく 城	正 (1314) 和 三	延 元 元	延 祐 元	至 元 二	23	41			
							後醍醐天皇隠岐に流さる。楠木正成兵を挙ぐ。(日) 鎌倉幕府亡ぶ。足利尊氏天皇に反旗をひるがえす。								
南	北	朝	さい 西	い 威	延 (1337) 元 二	正 平 四	至 元 三	至 正 九	13	22					
					尊氏將軍となる。北畠親房が「神皇正統記」を書く。(日)										
室	第	一	しょう 尚	し 思	しょう 紹	正 (1350) 平 五	応 永 二	至 正 十	(明) 洪武二十八	46	75				
						日本船鉄材をつんで牧港に入港。始めて中国に入貢す。(琉) 足利義満, 室町に「花の御所」を営む。南北朝合体す。(日)									
町	尚	氏	しょう 尚	し 思	おん 寧	応 (1396) 永 三	同 十 二	(明) 洪武二十九	永 楽 三	10	不明				
						義満, 明に国書をおくって国交を求む。金閣寺建立。(日)									
						一	しょう 尚	し 思	しょう 紹	応 (1406) 永 十三	同 二 十八	永 楽 四	同 十 九	16	不明
										首里城の増築, 国相懐機首里城外苑をつくる。(琉)					
						一	しょう 尚	し 思	し 志	応 (1422) 永 二十九	永 享 十 一	永 楽 二 十	正 統 四	18	68
										全琉球の統一, 那覇港を築港。(琉)					
一	しょう 尚	し 思	ちゅう 忠	永 (1440) 享 十二	文 安 元	正 統 五	同 九	5	42						
				護佐丸中城を築く。(琉)											
一	しょう 尚	し 思	たつ 達	文 (1445) 安 二	宝 徳 元	同 十	同 十 四	5	42						
				しょう 尚	きん 金	ぶく 福	宝 (1450) 徳 二	享 徳 二	景 泰 元	同 四	4	56			
長虹堤を築く。(琉)															

沖縄舞踊の歴史的背景について(その1)

時	王	しょう 尚	たい 泰	きゆう 久	(1454) 享 徳 三	寛 正 元	同 五	天 順 四	7	46	寺院を建て、巨鐘を铸造す。護佐丸の乱。(琉)
		しょう 尚		とく 徳	(1461) 寛 正 二	文 明 元	天 順 五	成 化 五	9	29	喜界島を討伐す。(琉) 応仁の乱。(日)
代	第	しょう 尚		えん 円	(1470) 文 明 二	同 八	成 化 六	同 十 二	7	62	一休大徳寺の住職となる。(日)
		しょう 尚	せん 宣	い 威	(1477) 同 九	同	同 十 三	同	1	48	
		しょう 尚		しん 真	(1477) 同 九	大 永 六	同 十 三	嘉 靖 五	50	62	武器撤廃、殉死の禁止。円覚寺建立。玉陵を築く。(琉) 銀閣完成。(日)
	しょう 尚		せい 清	(1527) 大 永 七	弘 治 元	嘉 靖 六	同 三 十 四	29	59	「おもろさうし」の編集。(琉) ポルトガル人種子島に鉄砲を伝える。キリスト教の伝来。(日)	
	しょう 尚		げん 元	(1556) 弘 治 二	元 亀 三	同 三 十 五	隆 慶 六	17	45	桶狭間の合戦、川中島合戦。織田信長京都に入る。(日)	
	しょう 尚		えい 永	(1573) 天 正 元	同 十 六	万 曆 元	同 十 六	16	30	守礼門に守礼之邦の扁額をかける。瓦奉行をおく。(琉) 信長安土に築城。信長本能寺で死す。(日)	
氏	桃山時代	しょう 尚		おん 寧	(1589) 天 正 十 七	元 和 六	万 曆 十 七	同 四 十 八	32	57	僧袋中琉球神道記を著す、中国より甘藷伝来。薩摩の琉球攻略。初めて砂糖を製す。(琉) 秀吉の全国統一、家康征夷大將軍となり、江戸に幕府を開く。(日)
		しょう 尚		ほう 豊	(1621) 元 和 七	寛 永 十 七	天 啓 元	崇 禎 十 三	20	51	「おもろさうし」完成、薩摩より朝鮮人陶工を招聘。(琉) 家光將軍となる、島原の乱。(日)
		しょう 尚		けい 賢	(1641) 寛 永 十 八	正 保 四	崇 禎 十 四	順 治 四	7	23	日光東照宮完成。(日)
江											

沖縄舞踊の歴史的背景について(その1)

戸 王 時 統 代	しょう 尚	しつ 質	(1648) 慶安元	寛文八	順治五	(清) 康熙七	21	40
			羽地朝秀,「中山世鑑」を著す。(琉) 由比正雪の乱,江戸の大火。殉死の禁止。(日)					
	しょう 尚	てい 貞	(1669) 寛文九	宝永六	(清) 康熙八	同四十八	40	65
			孔子廟落成,「中山世譜」の編集,御茶屋御殿落成。(琉) 將軍綱吉生類あわれみ令を出す,赤穂浪士吉良を討つ。(日)					
	しょう 尚	みき 益	(1710) 宝永七	正徳二	康熙四十九	同五十一	3	35
			三味線主取をおく。(琉)					
	しょう 尚	けい 敬	(1713) 正徳三	宝暦元	康熙五十二	乾隆十六	39	52
			玉城朝薫『組踊り』を創作す,蔡温三司官となる。(琉) 大岡忠相江戸奉行となる。初めて甘藷を小石川薬園に植える。(日)					
	しょう 尚	ぼく 穆	(1752) 宝暦二	寛政六	乾隆十七	同五十九	43	56
宮古,八重山に津波襲来。(琉) 林子平「海國兵談」を著す。(日)								
しょう 尚	おん 温	(1795) 寛政七	享和二	同六十	嘉慶七	8	19	
		国学を首里に建つ。(琉) 伊能忠敬諸國を測量す。(日)						
しょう 尚	せい 成	(1803) 享和三	同	嘉慶八	同	1	4	
しょう 尚	こう 瀬	(1804) 文化元	文政十	同九	道光七	24	48	
		英艦アルセスト号,ライラ号来航,オランダ船来航。(琉) ドイツの医師シーボルト来日,間宮林蔵のカラフト探検。(日)						
しょう 尚	いく 育	(1828) 文政十一	弘化四	道光八	同二十七	20	35	
		英仏の船舶しきりに来航,英人宣教師ベッテルハイム来る。(琉) 天保の饑饉,大塩平八郎の乱。(日)						
しょう 尚	たい 泰	(1848) 嘉永元	明治十二	同二十八	光緒五	32	59	
		廃藩置県,沖縄県となる。(琉)						

(注)山里永吉「沖縄歴史物語」363~369頁。